

## ごあいさつ

独立行政法人国立女性教育会館女性アーカイブセンターは、男女共同参画社会の形成に顕著な業績を残した女性や女性教育・女性施策等に関する過去の記録の収集・整理・保存・提供に取り組むとともに、さまざまな分野で「チャレンジした女性たち」を紹介する企画展示をシリーズで開催しております。

平成23年度に開催した「化学と歩む」からは、パイオニアのみならず、現在活躍する方々も紹介する「チャレンジした女性たちからチャレンジする女性たちへ」として、内容を更に発展・充実させてまいりました。

シリーズ7回目となる今回は、「映画と歩む」と題して、映画製作分野で歴史に名を残した女性及び現在活躍中の女性、計9名をご紹介しますとともに、各人に関連した台本、ポスター、写真などを展示しております。

海を越えて映画を撮った女性監督のパイオニア、映画を育て広めることに力を注いだ事業家、翻訳家、困難を乗り越えて映画を撮り続ける現役監督。女性たちの活躍は多岐にわたっています。

映画に憧れ、映画をつくる道を自ら切り拓いた女性たちと、今まさに切り拓きつつある女性たち——それぞれの実践の軌跡から、男女共同参画社会の形成をより推進するためのヒントを見つけていただければ幸いです。

最後になりますが、本展開催にあたり、松本侑壬子様をはじめ多くの方々にご協力いただきました。この場をお借りして深く感謝申し上げます。

平成26年8月

独立行政法人国立女性教育会館  
理事長 内海 房子

## 映画誕生120年、 もっと女性の目を!

映画の歴史は、1895年にフランスのリュミエール兄弟がシネマトグラフを発明してから、来年2015年で120年になります。映画史の中で女性監督の登場は早く、発明の翌年にはパリで23歳のアリス・ギイが、自作自演の“ストーリーのある”映画『キャベツ畑の妖精』を製作、世界で初の女性監督となりました。日本では、それから40年後の1936年、京都の撮影所で坂根田鶴子が劇映画『初姿』を撮り、日本の女性監督第1号となりました。さらに17年後、大女優田中絹代が1953年、『恋文』を監督、それ以後も9年間に6本撮り、この記録は長い間破られませんでした。

現在活躍中の日本の女性監督は、2001年の記録では106人(『女性監督映画の全貌』パド・ウイメンズ・オフィス)。そのうち日本映画監督協会の会員名簿に登録されている女性監督の数は25人、全体での比率は約5%にすぎません。

ちなみに、2013年に日本で公開された日本映画591本のうち25本が女性監督作品。全体の4.2%に当たります。外国映画の場合は、公開総数526本のうち女性監督作品は37本で、全体の7%です。作品を1本撮ったきりの監督も多いので、あくまで概数としても、男女共同参画などとは程遠い数字といえるでしょう。

映画は面白ければいい、監督を女性・男性でくくるのはおかしいという考え方もあるでしょう。実際、女性映画祭に参加したある外国の女性監督が記者会見で「自分を女性監督とは思っていない。私は映画監督です」と発言したのを聞いたことがあります。ともあれ撮りたい作品を撮れる機会を持てた女性はよいのです。問題は、撮れる能力も意欲も企画もあるのに、“女性だから”撮るチャンスに恵まれない、不利であるということなのです。

男性という片目だけではなく、女性の目を加えた複眼で見れば、世の中は立体的に見えるでしょう。映画を見る側の半数以上が女性なのです。男性の目で女性を描くことは否定しませんが、その逆もあって、初めて互いをよりよく理解し合えるでしょう。

100年前にアリス・ギイが言ったように「映画において男性にできて女性にできないものは何もない」ことも、それどころか、「女性ならでは!」と深く共感する作品に出会った喜びも、既に私たちは知っています。男性監督の優れた作品に加えて、これからは優れた女性の作品がもっと必要です。それは、日本の映画文化全体を豊かにすることに他なりません。

# アリス・ギイ (Alice Guy)

世界で初めて映画をつくった女性(監督、脚本、出演、製作)

1873年、パリ郊外生まれ。子どものころから無類の読書好き、演劇好き、そして一人で物語を作り、夢想することが大好きな少女時代を過ごしました。家庭は裕福でしたが、父が事業に失敗し、父と兄が相次いで他界。1894年、母を養うために写真機材会社・ゴーモン社で働き始め、優秀な社長秘書として社長の厚い信任を得ました。

1895年、リュミエール兄弟がシネマトグラフ(スクリーン投影式映画装置)を発明。映画を見たアリスは、映像が動くという仕掛けの面白さ(ハードウェア)だけでなく、映画のもう一つの魅力である物語性(ソフトウェア)に目をつけ、社長に「私ならもっとうまく撮ります」と映画製作を志願します。社長は、「秘書の仕事に支障がない限り」との条件付きで、会社の研究所の裏庭での映画作りを許可しました。

1896年、『キャベツ畑の妖精(La Fee aux Choux)』を製作。世界初の女性映画監督、そしてストーリーのある映画を作った最初の映画監督の一人となりました。アリスの成功によってゴーモン社は映画製作部門を作り、アリスは撮影所長として11年間で数多くの作品を手がけました。

1907年、結婚したアリスはゴーモン社ニューヨーク支店長となった夫とともにアメリカへ渡り、1908年長女を出産。翌年には製作現場に戻り、ジャンルを問わず精力的に映画を作りました。1910年には夫を社長とした独立プロダクションを立ち上げ、自らは撮影所長として年に14、5本の映画を作り続けました。生涯に撮った作品数は最新調査で734本とされています。

1918年に夫が株で大損、ハリウッドの大撮影所との競争にも敗れ、会社は破産。離婚を経て、1922年、二児を連れてフランスに帰国しました。しかしアリスがかつて作った映画の記録はほとんどなく、あっても他人の名前や間違った記載になっていました。

過去の業績が長らく忘れ去られていたアリスでしたが、1955年、映画のパイオニアとしての功績がようやく認められ、フランス政府からレジオン・ドヌール勲章を授与されました。

1968年、娘らに見守られて94歳で亡くなりました。



画像出典:ゴーモン社カタログ



# 坂根田鶴子

## 日本の女性映画監督第1号

1904年、京都の裕福な家庭に生まれた田鶴子は、家族とともに幼い頃から映画や芝居に親しみ、京都府立第一高等女学校を経て、同志社女子専門学校英文科(現・同志社女子大学)に入学しました。

見合い結婚を機に退学しましたが間もなく離婚。1929年、発明家の父の口利きで日活京都太秦撮影所にスタッフとして入社し、溝口健二監督の組で小道具、シナリオ速記、記録など、映画づくりに必要なさまざまな訓練を積み、1935年、溝口とともに第一映画に移りました。

1936年、新派劇を映画化した『初姿』を監督。日本初の女性映画監督が誕生しました。しかしそれ以降、劇映画で監督のチャンスは与えられませんでした。

1939年、日中戦争が泥沼化する中、映画法が施行されます。劇映画と文化映画(教育映画、科学映画などの総称)の併映が義務づけられたため、文化映画業界は一時のバブルに沸きました。田鶴子は文化映画に次なるチャンスを求め、1940年、理研映画に就職して北海道で長期ロケを敢行し、アイヌ民族を異民族同化政策のお手本として描き出した『北の同胞(アイヌ)』を監督しました。しかし、文化映画バブルは映画資材の不足もあって短命に終わります。

1942年には満州に移住、満洲映画協会(満映)に就職しました。アジア随一の設備を持つ満映で、田鶴子は初めてコンスタントな映画づくりを手がけました。女性農業移民=「大陸の花嫁」募集のための映画『開拓の花嫁』など、十数本の短編プロパガンダ映画を次々と監督し、女性技術スタッフの育成も実施しました。

敗戦翌年の1946年、京都に引き揚げ、溝口の仲介で松竹に就職しましたが、監督ではなく編集課記録係主任としてでした。1961年に定年切り下げで退社、その後も1970年まで、大映のアルバイト記録係として現場に関わり続けました。

1975年、ドキュメンタリー映画『ある映画監督の生涯 溝口健二の記録』に出演し、その年に69歳で亡くなりました。



戦後記録係として働く田鶴子 写真提供: 京都文化博物館

# 川喜多かしこ

## 映画ひとすじに

1908年に生まれ、横浜で育ったかしこは、英語を勉強しようとフェリス和英女学校(現フェリス女学院)に入学しましたが、1923年の関東大震災で父親を亡くしました。

横浜YWCA秘書養成科を卒業した1929年、生活のため、東和商事合資会社にタイピスト兼社長秘書として入社。最初の仕事が映画解説の翻訳で、そこで映画と出会いました。同年、社長の川喜多長政と結婚。

1932年、新婚旅行を兼ねた最初のヨーロッパ旅行で、レオンティーネ・ザガン監督の『制服の処女』を「厳しい抑圧の下におかれた少女たちの解放の叫び」と受けとめ、反対する長政を説き伏せて買い付けました。かしこの思いをそのままに表した宣伝が成功し、日本での上映は大ヒット。以降、買い付けでの作品選択はかしこの仕事となり、ヨーロッパの映画を次々と紹介、日本にヨーロッパ文化を知らしめる一端を担いました。

同時に、映画が世界の人々の相互理解を深めるという理念のもと、すぐれた日本映画を海外に紹介する仕事も積極的に行い、国際映画祭への出品の手助けや試写の実現に奔走しました。

日本アート・シアター・ギルド(ATG)や、高野悦子と組んで岩波ホールで展開した「エキップ・ド・シネマ」運動では、日本で馴染みの薄い国の芸術的映画や、外国の埋もれた名作映画の上映に取り組みました。

また、映画は商品である以上に文化的財産であるとの思いを抱き、1960年にフィルム・ライブラリー助成協議会を結成して、映画フィルムの保存・貸出事業を行いました。かしこは著書に「フィルム・ライブラリーは、映画人の養成と教育をその目的の一つとするが、アート・シアターはさらにそれら映画作家の新人たちに発表の場を与えることを目的とする。そのどちらが欠けても、その国の映画の質的向上は阻まれる」と書いています。フィルム・ライブラリー活動は、後に東京国立近代美術館フィルムセンターの所蔵作品の基礎となり、また現在も活動中の財団法人川喜多記念映画文化財団の運営につながっていきました。

1993年、85歳で亡くなりました。



写真提供：公益財団法人川喜多記念映画文化財団

# 田中絹代

## 昭和の大女優で日本の女性監督パイオニア

1909年山口県生まれ。映画に憧れ、1924年、15歳で松竹下加茂撮影所に入所。可憐な演技が評判となり、18歳で主演抜擢、22歳で日本初のオールトーキー映画『マダムと女房』に出演(1931)。上原謙と共演した『愛染かつら』(1938-39)は空前の大ヒットを記録しました。1940年からは溝口健二監督の映画に出演、演技派として大きく脱皮します。

戦後も、紆余曲折やスランプを経て、溝口監督との名コンビで『西鶴一代女』(1952)、『雨月物語』(1953)などに出演。国際映画祭で次々に賞を獲得し、昭和を代表する大女優の一人となりました。

一方で絹代は「中年になるとなかなか主演がとれないし、脇役ではさらにやりがいのある役は限られる。むしろ、監督として自分のできない若い役を新しいスターにやってもらいたい」という気持ちから、映画監督への進出も考えていました。

1953年、絹代は映画『恋文』の監督への打診を受け、成瀬巳喜男監督に相談。成瀬が撮影中の『あにいもうと』に監督見習いとして加わり、演出の手ほどきを受けた後、『恋文』のメガホンを握りました。同年公開された初監督作品への批評は好意的で、日本映画監督協会からは第2作『月は上りぬ』の監督依頼も来ましたが、以降、溝口監督が大反対。絹代はかえって発奮し、1954年に映画を完成させましたが、以降、溝口監督とコンビを組むことはありませんでした。

絹代はこの後、1962年までに『乳房よ永遠なれ』『流転の王妃』『女ばかりの夜』『お吟さま』を監督。「監督としては破綻がなく、中堅どころの成績だった」という評価が『日本映画人名事典』に載っています。一人の女性映画監督が一般公開劇映画を6本作った記録は、荻上直子監督(『かもめ食堂』など)の登場まで約半世紀の間破られませんでした。

67歳で亡くなる3年前の1974年、『サンダカン八番娼館 望郷』に老女役で出演。迫真の演技が国内外で絶賛され、1975年のベルリン国際映画祭で銀熊賞(女優賞)を受賞しました。



『月は上りぬ』撮影時 写真提供:芸游会



# 高野悦子

## 映像が女性で輝くとき

1929年、旧満州生まれ。1945年5月、富山に疎開して終戦を迎えました。

1946年、戦後最初に日本で封切られた米国映画『キュリー夫人』（マーヴィン・ルロイ監督）を見て、自分も彼女のようにになりたい、好きな仕事を見つけて社会に役立つ人間になりたいと感銘を受けました。

日本女子大学の生活科学科に入学しましたが、弁護士という職業に興味を持ち、2年生の時に社会福祉科へ転科。そこで「マス・メディアとしての映画」研究に取り組み、日本で封切られた作品すべてを観ることになったのをきっかけに映画に夢中になりました。

東宝文芸部で製作企画調査などの業務に従事したのち、映画監督になる道を求めて1958年にフランスへ渡り、パリ高等映画学院（IDHEC（現FEMIS））監督科に日本人として初めて入学しました。

1962年に帰国後、映画化を進めた企画が別の監督により映画化。著作権裁判では和解したものの、以降、映画監督と別の道を歩みます。

1968年、義兄の岩波雄二郎が当時の岩波書店社長だった縁で、東京・神田神保町の岩波ホール完成に伴い総支配人に就任。全国7,000館以上の劇場・映画館の中で唯一の女性支配人となりました。目先の利益よりも質を尊重する考え方をもとにさまざまな企画を展開、6年間に長短750本の映画を上映しました。

1974年からは、川喜多かしこと共同主宰で、岩波ホールを拠点に世界の埋もれた名画を世に紹介する「エキブ・ド・シネマ」を開始。岩波ホールは全国のミニシアターの先駆けとなりました。

1980年から東京国立近代美術館フィルムセンター運営委員を務め、日本映画遺産の収集、保存に関与。

その後も、女性の社会進出の先駆者として、女性監督やプロデューサーの支援や育成を行ったり、国際的な映画イベントの日本側実行委員を務めたりするなど、多数の企画に関わって精力的に活動、映画を通じて国際交流に貢献しました。

2013年、岩波ホール45周年の日に総支配人のまま83歳でその生涯を閉じました。



写真提供：岩波ホール

## 関口祐加

### 映画監督としての生きざまは「人生の“点”を精一杯生きる」

1957年、横浜に生まれ、英語が堪能な叔父の影響を受けて、将来は海外で仕事がしたい、と英語の勉強に励みました。中学・高校とアメリカ人の宣教師のいるミッション・スクールに通い、YMCAの英語クラスや、留学生との交流のボランティアなどで、英語の力を磨きます。高校卒業に当たって進路を決めかね、1年間の浪人生活を送りますが、その中で「国際関係論」という学問を知り、東京国際大学(前・国際商科大学)に入学して、夢中になって4年間勉強しました。

大学を卒業した1981年、オーストラリアへ留学することにしました。生活は刺激的で、したが、国際関係論のコースは退屈極まりなく、友人に「文化人類学のクラスは面白いからおいでよ」と誘われました。そこで見た、民族学的記録映画に激怒し、一瞬で感情を引き出す映像ってスゴイと思い、「映像を作る人間になるんだ、このことをするために私は生まれてきたんだ」と確信を持ちました。この時、25歳になっていました。

その後8年ほどかかって、『戦場の女たち』(1989年公開)を作りました。英語の能力、国際関係論的な切り口、文化人類学的なアプローチ、と人生の中で“点”として存在していたものが、映画監督になり、全て“線”としてつながったことを実感しました。ニューギニア戦線を女性の視点から描いたこの作品は、世界中の映画祭で上映され、メルボルン国際映画祭でグランプリを受賞しました。アン・リー監督にコメディ・センスを絶賛され、1992年『When Mrs. Hegarty Comes To Japan』、2007年『THEダイエット!』と、重喜劇の映画を撮り続けます。

2010年、認知症を発症した母の介護のために帰国。2012年、YouTube投稿をまとめた長編動画『毎日がアルツハイマー』を発表すると、認知症のイメージを覆す作品として大きな反響を呼びました。

2014年には、続編に当たる『毎日がアルツハイマー2 関口監督、イギリスへ行く編』を製作。7月から、東京・ポレポレ東中野ほか全国で公開されています。



撮影：神保誠



# 戸田奈津子

## 外国映画の面白さを字幕で伝える

1936年生まれ、戦争で父を亡くし、東京で育ちました。戦後、外国映画が解禁になり、会社勤めを始めた母と帰りに待ち合わせて洋画を観るようになります。

1949年、中学で英語に出会い、お茶の水女子大学附属高校時代に観た『第三の男』（1952年日本公開）で、字幕の面白さを意識しました。

1955年、津田塾大学英文科に進学。大学へ進み、職を得て、稼ぎ手の役目をバトンタッチするとの暗黙の了解が母子の間がありました。就職をどうするか考え始めた大学3年のときに、自分の好きなものの2本柱、映画と英語を両方満足させられる、と、字幕翻訳が浮かびました。映画のクレジットに名前があった翻訳家・清水俊二氏の住所を電話帳で調べ、字幕翻訳をしたいと手紙を出します。清水先生から「字幕をやりたいとは困ったねえ。とにかく難しい世界だから」と言われ、一旦就職することにしました。

しかし暇なのに毎日拘束されるOL生活が苦痛で、1年半で見切りをつけ、「翻訳なんでもうけたまわります」のアルバイトを開始。清水先生にもアピールを続け、映画に関わる仕事の手伝いを頼まれ、映画会社からもビジネスレターの処理やシノプシス（あらすじ）作りなどの仕事に来るようになります。1969年、映画プロデューサーの来日記者会見で突然通訳を頼まれたことをきっかけに、次々と通訳の仕事も入り始めましたが、願っていたのは字幕人生の開幕でした。

1969年、『野生の少年』の字幕翻訳をし、ついに字幕への道が開けましたが、その後も本数は遅々として伸びませんでした。

転機が訪れたのは10年後。来日したフランシス・コッポラ監督のガイド兼通訳を務めたことで同監督から推薦を受け、大作『地獄の黙示録』（1979年アメリカ、1980年日本公開）の字幕を手がけたところ、大ヒット。メジャーな配給会社から次々と字幕の仕事が舞い込み、多い時は年50本もの字幕翻訳を行うようになりました。それ以降、かつて男の世界だった字幕翻訳に女性が増え、結果的に女性にも字幕への道を拓くことになりました。



# 羽田澄子

## 記録映画を撮り続けて

1926年、旧満州で生まれ、育ちました。父は教師、母は専業主婦で、自由学園創設者の『婦人之友』の読者でした。家には羽仁もと子著作集もあり、女学校時代それらに出会い、自由学園に進学することを決めました。

1942年、自由学園に入学。色々な問題を自分たちで考える授業を受けました。戦争が厳しさを増し、学校の3年間の最後の年は工場に学徒動員され、飢えと空襲の中、働きました。1945年3月卒業。大連に戻り、1948年日本に引き揚げました。

1948年、羽仁説子先生から誘いを受け、岩波映画製作所で岩波写真文庫の編集者となりました。共に編集をしていた説子先生の長男・羽仁進氏が同製作所の映画部門に移る際、声をかけられ、今度は映画の企画やシナリオを手がけるようになりました。

1953年、シナリオを書いた『歯』で初めて助監督となり、羽仁進監督の記録映画『教室の子供たち』でも助監督、1957年『村の婦人学級』で初の監督を務めます。

1959年、『村の婦人学級』の製作責任者だった工藤充と結婚。その後、体調を崩し、監督の仕事から離れて企画・脚本・編集の仕事に従事しました。

1967年、監督として現場に復帰。岩波映画の社員として映画を撮る一方、妹を42歳で亡くしたことをきっかけに、岐阜県にある樹齢1300年の桜を4年がかりで撮り、自主映画『薄墨の桜』を完成。1977年、高野悦子さんの声かけによって岩波ホールで「映像個展」として一晚上映されました。この作品によって「自分のつくりたいものを、つくりたいようにつくる途」が開けました。

1981年、岩波映画を定年退職。夫がプロデューサーとなって、『早池峰の賦』（1982）から二人三脚の映画づくりを開始。『AKIKO—あるダンサーの肖像—』（1985）、『痴呆性老人の世界』（1986）、『元始、女性は太陽であった—平塚らいてうの生涯』（2001）など、様々な作品を撮り続けています。特に『痴呆性老人の世界』は、当時ほとんど知られていなかった認知症の老人の実態を取り上げたことで大きな反響を呼び、全国各地で上映されました。

最新作は2012年、86歳で完成させた『そしてAKIKOは…—あるダンサーの肖像—』です。



『遙かなるふるさと—旅順・大連—』撮影時 大連病院前で  
写真提供：自由工房



# 松井久子

## 女たちの思いを映画に託して

1946年、東京に生まれ、20代は雑誌のライター、30代は俳優のマネージャー、40代はテレビドラマのプロデューサーと様々な職を手がけました。

テレビの世界で仕事を続けるうち、50歳間近で「映画をつくってみたい」と思うようになり、芥川賞小説『寂寥郊野』を読んで、プロデューサーとして資金調達に奔走します。シナリオ執筆を新藤兼人監督に依頼し、監督もぜひお願いしたい、と氏を訪ねたところ、その場で「これはあなたの映画ではないか。勇気をもって自分で監督をしてみなさい」と強く勧められたことが、人生を大きく変えることになりました。

日本に根深く残る家父長的環境で育ち、「良妻賢母」にあこがれ、20代前半で結婚しましたが、10年後には子を一人抱えて離婚し、以降は仕事を最優先に生きてきました。それから20年の歳月は、これまで自分を縛ってきたものから解き放たれていく日々でした。そして50歳になったとき、ようやく「自分の言葉で語りたい」と、映画監督という仕事の中で、そこに挑戦したいと思ったのです。

女性である私が監督をすることになって、いちばんに高く強固な壁は「リーダーシップ」の問題でした。映画監督の仕事は、ほかのどんな仕事よりも強いリーダーシップが求められます。『寂寥郊野』を原作とした第1作『ユキエ』の現場で、人を束ねる力や人心掌握術がなければだれも動いてはくれないと知り、自身のなかに巣食う女性であるがゆえの「依存心」のために七転八倒しました。

2002年に第2作『折り梅』を公開、その後、第3作日米合作『レオニー』は、6年半をかけて13億の資金を集め、企画から公開まで8年をかけて実現しました。アメリカで多国籍のスタッフと映画をつくる中で、人の信頼を得るためにもっとも重要なのは「リラックスした自信」、と身をもって知りました。

そして68歳の今、84歳になる先輩フェミニストから、「私たちがしてきたことを撮ってみたい？」という話をいただきました。これまでの人生を再点検する題材として、4作目の小さなドキュメンタリーに取り組んでいます。

第4作『何を怖れる』は2014年9月公開です。

